

# 夢織

やさしい嘘と冷たいほんとう。

玄の糸



## 『夢織』

2007/10/22

seren arbazard

### I

ルージュの月に舞い降りた初雪から 2 日経った夜のこと、メルセルを目前に控えるアルバザードの中央アルナ大学からの救難信号を受け、警察は急行した。

学生が騒ぎでも起こしたのかと軽い気持ちで向かった警官らは、向かった先の教室で言葉を失った。

教室のドアは無造作に壊されていて、中には吹き飛ばされた机が転がっていた。床にはところどころ血が付着し、教室の入り口では学生が胸から血を流して死んでいた。そして中には制服を着た一体の腐乱死体があった。

警察はその夜、唯一の生存者である学生を保護した。だがその学生は廃人になっており、警察の呼びかけにも一切応じず、一歩も動くことができなかった。死んではないものの目は虚ろで、まるで別の世界にでも行ってしまっているかのようだった。

教室に残っていたのは 3 人。入り口で死んでいた学生、今日登校していたのに突如腐乱死体となって発見された学生、そして唯一の生存者である廃人となってしまった学生……。一体、この 3 人の間に何が起こったというのだろうか。

## II

雪の降る静かな校庭をアリスは上機嫌で歩いていた。

ルージュの月、アルシェの週。まだ雪が降るには少し早い。今年は寒くなるのだろうか。

「それにしても初雪の日に夜間外出できるなんてラッキーだわ」

サクサクと新雪に足跡を残していく。

アリスはアルバザードの中央アルナ在住で、アルナ前期大学 2 年の学生だ。留年も飛び級もせず、年齢は順当に 15 歳。

茶色い髪に白い肌。背丈は中くらいで成績も中くらい。

自分では特に変わったところのない、ちょっと控えめな女の子だと思っている。どこにでもいるような子と周りから言われる。

趣味は音楽。ピアノを弾くことだ。学校内の同好会と、町内の同好会に入っている。最近は学校で弾くことが多い。

だから、しいていえば自分が人と違うのはピアノの腕前だと思う。実は今度のメルセルで演奏会に誘われている。そこで弾くつもりだ。

午後の 3 コマの授業が終わると 5 時になる。秋もこのころになると 5 時でもう真っ暗だ。アルバザードは夜間外出が禁止されているので、夜になる前に学生は足早に帰る。

夜間外出をするには許可がいる。アリスは学生なので、事務棟に申請をしに行く。摘要を書いて許可が下りれば事務棟が役所に代理で届け出るという仕組みだ。面倒だが、為政者ミロクのころに比べれば今のアルテナの統治は融通が利くとの話だ。

夜間外出は面倒だがメルセル前は別だ。メルセルの 1 月前、つまりルージュの月は夜間外出が解禁になる。面倒な手続きは不要だ。

アリスは学内の同好会をするため、放課後、ピアノの練習をしていた。あまりに熱中しすぎて、気付けば食事もせずに 7 時を回ってしまった。

「いけない、遅くなっちゃった。バチがあたっちゃう」と呟きながらアリスは校舎をあとにした。

そして雪の降る校庭を一人で歩いているのだ。雪は音を掻き消す。静かだ。ルージュの月なのに周りに生徒は誰もいない。辺りはすっかり暗い。

とそのとき、小さな音がするのに気付いた。

「これは……ピアノ？」

アリスは音のするほうを見た。

「あれ？……あっちって教室じゃないの？」

音はさっきまでアリスがいたところから聞こえてくる。

「おかしいなあ、私のほかには誰もいなかったのに」

アリスは歩き出したが、誰が弾いているんだろうという好奇心に駆られ、校舎へ戻ることにした。久々の夜間外出解禁に気分が高揚していたのかもしれない。

玄関を通過して廊下を渡り、階段を登る。

「あれ……廊下の電気が消えてる……」

ピアノのある教室の近くは灯かりが消えていた。この時期はいつも点いているはずなのに。誰か消してしまったのだろうか。少なくとも自分ではない。

「薄暗いなあ……」

廊下の先からはピアノの音が聞こえる。間違いなく誰かいるようだ。

てくてく歩くアリス。とそのとき、ふと妙なことに気付いた。

「あれ……？でもなんで灯かり消してピアノ弾いてるんだろう。見づらくないかな」

立ち止まって首を捻る。

「うーん……誰なんだろう、謎だわ」

そうこうしているうちに教室の前に着いた。教室のドアは押し戸だ。出るときに引く。透明なガラス戸だ。ところが教室内のプライバシーを確保するため、閉鎖時は曇りガラスになる仕組みになっている。それで、中を見ることができない。

アリスはゆっくりとドアを薄く開けた。できるだけ音を立てないように。曇りが取れるのはもう少し開けてからなので、隙間から見る。

するとピアノのところに少女が座っているのが見えた。薄暗いのでよく分からないが、自分と同じ制服を着ているからアルナ大の人間だろう。

何年生だろうか。肩の腕章に学年を表す刺繍がしてあるはずだが、ここからでは見えない。顔を見るが、よく見えない上に見覚えもない。

「でも、上手だわ……」

ふうと息を吐いたところで突然少女がガタッと立ち上がった。ピアノの音が止まる。

「やば、見つかった！」

ビクとするアリス。言い訳しづらいポーズだ。なんて言い逃れようか考えていたが、少女はアリスではなく自分の後ろを振り返った。

シルエットだけでも少女が怯えていることが伝わった。少女はピアノに手を付き、半ば腰が抜けたような姿勢でいる。

「い……いや！」

少女の声がする。アリスは眉をひそめた。ほかに誰かいたのか？

「こないで！」

少女は叫び声を上げるが、恐怖に怯えて体が動かないようだ。

アリスは不安な顔つきで顔をしかめる。「な……なに？なんなの？」

すると壁の向こうに大きなシルエットが浮かんだ。やがて少女の肩に伸びる手。

「……！」

アリスはそこで初めてそれが見えた。黒いテーベを着た誰かが少女に迫っていたのだ。ゆっくり、ゆっくりと。

テーベは手に大きな鎌を持っていた。それが大きなシルエットを作っていたのだ。

少女は悲鳴にならない声を上げた。そしてメトロノームを手にとると、テーベに投げつけた。メトロノームは腕にぶつかり、地面に落ちて壊れる。

テーベは声を出すこともなく、少女の首に鎌をかける。

それを見たアリスは怯え、「ひっ！」と小さな悲鳴をあげて、カバンを落としてしまった。その瞬間、テーベがアリスに気付いてこちらを振り返った。

——え？

アリスは目を疑った。

テーベを着ていたのは人間ではなかった。明らかに、少なくとも、人間以外の何かだった。それは骨……髑髏のような顔をしていた。

髑髏にむき出しの筋肉や肉片のこびりついた顔。ぎょろっとして落ちそうな目玉。腐敗しかけた死体のような顔。それがテーベを着ているものの正体だった。

「い……いやああああ！」

アリスは絶叫するとともに走り出した。

「逃げなきゃ！逃げなきゃ！」

カバンを抱えて、何度も転びそうになりながら走った。途中階段の手すりに体をぶつけたが、構いはしない。

ひたすら走って校舎を出た。階段で滑ってしまい、空中を泳ぎながら雪の積もった地面に真正面から突っ込んだ。

立ち上がるのもやっとならぬうちに、這いずりながら走っては倒れを繰り返して校庭を走り抜けた。

学校を出てコノーテ通りまで出ると、人だかりがあって、そこで初めてアリスは足を止めた。

今更になってもものすごい疲労感に襲われた。はぁはぁと大きく息をつく。こんなに走ったのはいつぶりだろう。気持ち悪い。急に走りすぎた。貧血のような状態になってしまい、アリスは歩道の柵に体を預けて休んだ。

「なんだったの……今のは」

あれは人間ではなかった。化け物。

……まさか、アデル？アルディアの時代にアセットが滅ぼしたアデルか？

「いや、そんなことより警察が先だわ！あの子、首に鎌をかけられてた！」

アリスはぐっと脚に力を込めた。が、そこでふと立ち止まった。

「……でも、警察になんて言うの？死体みたいなアデルが女の子を襲ってました？誰が信じるの？それにあの子、多分もうとっくに殺されてるんじゃないだろうか。もう何分も立ってしまったし。今更行ってまだ犯人がいるとは思えない。もし彼女の死体があったら、疑われるのは誰？私……よね。冤罪だわ。でも、「アデルがやったの」なんて言って誰が信じてくれる？……私にできることは何もないんだ……」

唇を噛みながらアリスは西区の自宅へ帰った。

家に帰ってシャワーを浴びて夕飯を食べると、なんだかさっき見たのがすべて幻だったような気がしてきた。

「そうよ、冷静に考えてあれが現実であるはずがないわ。私は悪い夢を見ていたのよ」

アリスは自分にそう言い聞かせると、早めに床についた。

### III

次の日、学校に行くと何事もなかったかのようにクラスメートが来ていた。

「おす、アリス」

最初に挨拶してきたのは恋人のラマンだった。同じクラスで、大学に入ったところに付き合いだした。

特に成績優秀とか運動神経がいいとかいうわけではない。背だってふつうだし、家もお金持ちではないし、顔もふつうだ。だが人当たりがよく、優しい。そんなところが気に入っている。

「おはよ、アリス」

手を振ってきた少女ミーナはアリスの幼馴染だ。ラマンを紹介してくれたのも彼女だ。彼女は色白で金色の髪をしていて、目が青い。綺麗な少女で、アリスは子供のころから引け目を感じている。

「おはよ～」

アリスが席につくと、2人が寄ってきた。いつもの光景だ。

ラマン「なあアリス、お前大丈夫だったか？」

「何が？」

ミーナ「事件よ。音楽室で学生が死んでたって話。ニュース見てないの？」

「えっ!？」

アリスは飛び上がらんばかりに驚いた。

ラマン「そりゃ驚くよな。音楽室って、お前昨日もいたはずだもんな」

「ほら、今朝のニュースよ」といってミーナは腕につけた電子端末アンスからホログラムを表示する。

そこには確かに音楽室の事件が載っていた。死んだのはアリスの1つ下の学年。14歳の少女だという。間違いない、あの子だ。顔写真とシルエットがよく似ている。

死亡推定時刻は昨日の夜。外傷はないそうだ。死体には朝まで誰も気付かなかったという。第一発見者は警備員。発見したときは既に死んでいたという。

そして気になるのが死因だ。死因が医者には特定できないとのこと。外傷も薬物反応もなく、ショック死でもない。最も似ているのが老衰で死んだ患者の体だそうだ。だが、14歳の少女が1日で急に老衰することなどあるのだろうか。死体は急激に老女になっていたわけでもない。少女の体のままだ。なのに……一番似ているのが老衰……。これはどういうことだろうか。

ラマン「この子、音楽同好会のメンバーだったのか？」

「ううん、違うわ……知らないもの」

ミーナ「なのに入り込んでピアノ弾いてたなんておかしいわね。その上、死んじゃうなんて……」

ラマン「それに電気もつけてなかったらしい。なあ、お前昨日音楽室に行った？」

「いたけど……夜には帰っちゃったから」

ラマン「そうか。まあヘンなことに巻き込まれなくてよかったよ」

アリスの頭では昨日の光景が再生されていた。

違う……これは事故なんかじゃない……だって……私、見たもの。鎌を持ってテーベを着た……。

とそのとき担任のホミスが入ってきた。朝礼だ。時間は8時前。いつもどおりだ。

ホミスは20台の男性教師だ。趣味は音楽で、同好会の顧問をしてくれている。昨日も夕方まではピアノをみてもらっていた。

よかった、先生も無事だったようね。しかし何も知らない皆はあれが事故だと思っているのね……。

「えー、今日は皆さんも知ってると思いますが、音楽室での事件について話します。昨日、アルギの女生徒が音楽室で亡くなりました。警察の調べでは突然死とのことで、事件性はないとのことです。ですので、音楽室の利用者は気味悪く思うかもしれませんが、安心してください。また、故人を偲んで有志の方は今ここで ladoova の印を組む時間を与えます」

アリスは印を組んで小さく ladoova と呟いた。

「あれは夢じゃなかったのね……」

アリスはぎゅっと印を組んだ小指に力を込めた。

「ごめんなさい、私が逃げてしまったばかりに……。でも、私に何ができたというの。きっと私には逃げるしかできなかった。許して」

午前の授業が終わると2時間の昼休みとなる。食事をし、歓談し、昼寝するための時間だ。いつもは外に出て食べるのだが、昨日の雪が溶けてびしょびしょだから中で食べることにした。

パンをかじっていたら、ふとラマンが思い出したように呟いた。

「あれはほんとに事故だったのかなあ」

アリス「あれって？」

「ほら、今朝の事故。老衰ってありえるのかな」

「どうだろう……」

アリスは少し青ざめた口調で答えた。

「案外アデルのしわざだったりしてな」

どきとした。



ミーナ「こらラマン、アリスを怖がらせるんじゃないわよ。この子昨日音楽室にいて、た  
たでさえ不気味に思ってるんだから」

「悪い悪い。でも実際問題おかしいだろ。ミーナ、お前どう思う？」

「アデルかって話？そりゃニュースでも言われてたけどさあ。この時代にアデルだなんて」

「分からんよそんなの。確かに俺ら人間は魔力を失って久しいし、アデルもあらかたアシ  
ェットが滅ぼした。でも生き残りがいるかもしれない」

「魔物の生き残り……ねえ。私からすれば何百年か前に人が空を飛べたのだって怪しい話  
だわ」

アリス&ラマン「ハイゼン！」

「う……」ミーナはばつの悪そうな顔をして黙った。ふうっと頬を膨らませてパンをはも  
はもする。

ミーナ「まあ、私だって老衰なんて説明つかないなって思うわよ。いいわ、アデルの仕業  
かもしれないことにしてあげる」

ラマンは少し得意げな顔をした。

ミーナ「もーっ、あんたそんなに言うんなら召喚省に入ってアデル研究でも専攻すればい  
いんだわ」とふざけて笑う。

ラマン「そりゃいいな。そしたらアリスはタレスの嫁だな」

にっこり笑うラマン。

アリス「はわわっ、わ、わたしがお嫁さん……！」

アリスは思わず赤面してしまった。

ミーナ「あー、仲のいいことで。うらやましいですな」

にやつくミーナ。ラマンを紹介した者としてはご満悦といったところか。

ミーナ「ラマン、そしたらあんた先に後期大学に入らなきゃだわよ」

「へいへい。とりあえずは今度の期末をがんばるよ」

アリス「あはは♪」

「私、紅茶淹れてくるね」とアリスは席を立った。

と、そのとき一人の少女と目が合った。

「あ……」

それは同じクラスの紗枝という少女だった。大人しく一人で食事をしている。周りを見  
ると、彼女はどこのグループにも属していないのがわかる。そういえば彼女が誰かと一緒  
にいるのを見たことがない。

「ね、ミーナ」小声で話しかける「紗枝も紅茶に誘わない？」

「んー……」ミーナはぼやけた声を返す。

「なあに？嫌なの？」

「嫌っていうか……面識ないし」

「だから今作るんじゃない」

「別にいいけど……あの子暗いし、話しにくくない？なんかお互い気を使って終わっちゃいそうな感じがしてさ……」

ラーメンを見ると俯き加減でミーナの言葉に合わせて頷いている。

「ふうん……そっかあ。まあ、無理にとは言わないわ」

アリスはすっと紗枝の横を通り過ぎて紅茶を淹れにいった。紗枝はアリスを見ることもなく、黙々とパンを食べていた。

午後の授業が終わるとアリスは音楽室に向かった。ラーメンとミーナは図書館で期末テストに向けてガリ勉だそうだ。

音楽室に行くと、昨日事故があったわりに会員が集まっていた。いや、あんなことがあったからこそかもしれない。事故の現場に入れるのはある意味特権意識を感じさせるのかもしれない。

やはり事故の噂でその場は持ちきりだった。ラーメンのようにアデルの仕業と考えるものも中にはいた。しかし誰の噂も取り留めのないものだった。アリスはなるべく昨日見たことを思い出さないようにしていた。あれは夢……のはずだ。

顧問のホミスが来ると、練習が始まった。彼はソバージュの髪を揺らしながらピアノを弾いていた。

その姿を見ながらアリスは昨日の少女のことを思い出していた。忘れようとはしているのだが、できない。そう、昨日確かにここであの少女がピアノを弾いていた。そして後ろからテーベを着た骸骨が……。少女の首に大きな鎌を架けて……。

「だめだめっ！」アリスは首を振った。

だがあの骸骨の顔が頭をよぎる。あの恐ろしい顔が。

「あれ……？」

そこでふとアリスはあることに気が付いた。

「ちょっと待って、私があいつの顔を見たってことは……」

すっと血の気が引く。

「やだ……あいつも私の顔を見たってことじゃない……」

ぞくっとするのを感じ、アリスは急に後ろを振り返った。だが幸いなことにテーベは来ていなかった。

「……よかった。いや、よくないよ……だって私」

そう、確かに顔を見られた。

「どうしよう……私しか知らない事件の真実があるなんて……それって次は私が狙われるかもしれないってことだよ。てゆうか、ふつうに考えて私を生かしておくわけないよね……。ど、どうしよう……気が動転しててそこまで考えが及ばなかったよ」

そのときホミスがふと指を止めた。

「アリスさん？どうしたの。顔色が悪いよ」

「え……あ、いえ……大丈夫です」

「いや、かなり青いよ。みんな、私は彼女を保健棟に連れていくから、少し練習してください」

「あ、大丈夫です、一人で行けますから」と言って歩くが、ぐらっとしてしまう。ホミスはアリスの腕を取ると、「ほらあ」と心配そうな顔で言った。

「無理しないの。ついてきなさい」

「……はい」

音楽室を出て、昨日覗き見した廊下を通る。

「風邪引いたのかい？昨日初雪だったしね」

「いえ……身体は大丈夫なんですけど」

「じゃあ心の問題かい？私は君の担任だ。なんでも言ってください」

「えと……でも……変な話なので」

「邪推するが、ラマン君のことかい？」

「えっ！」

アリスは口を押さえた。

「いや、君たちが恋愛関係にあることは先生たちも知っていますから」

「……ですよ。でも彼のことじゃないんです。彼とは仲良くしています」

「では、テストのこととか？」

アリスは首を振る。

「……昨日の……音楽室の」

「ああ……」ホミスは暗い顔になる「不思議な話だよ。私は早く帰ってしまったからその子を見損ねてしまったが、写真を見るかぎり同好会の子でもなかったし。それにその……老衰……っていうのもおかしいね」

「ですよ……」

「あの事故は今じゃすっかり生徒の噂の種らしいが、みんなゴシップとして捉えているらしい。君は真面目に捉えてしまっているようだね。まあそのほうが死者の弔いにはなるが」

「はい……。その、先生……ラマンはアデルの仕業じゃないかって思ってるみたいなんです。そういうの、ありえるんでしょうか」

「魔法も魔物もアルディアでは盛んだったようだが、今の時代はとんとね。シオン様などはそれでも魔法を使われたそうだが、今の時代の人間はさっぱりのはずですよ。ただ……」

「ただ？」

「レイユは待望期のことだ。ランタスの転生を待つ時代だ。転生するからには、そのときまた世の中に何かがあるということだ。魔法じみた何かがある。レイユは転生の前にあるの

だから、この時代にも魔法じみた何かが減んでいるとは到底思えない。だからあるいは…  
…」

「なるほど、論理的です」

アリスは頷いた。

「では……仮にアデルだとしたら……もし彼女を襲ったのがアデルだとしたら……そしてもしその殺害現場を誰かが見てしまったとしたら……アデルはその目撃者をどうするもの  
なんでしょうか」

「はあ？面白いことを考えますね。さあ、それは犯人に聞かないと分かりませんね」

ホミスはアリスの話の聞くと言った手前笑わないでいるが、内心笑いたいに違いない。  
アリスは恥ずかしくなってそっぽを向いた。

「あ……」

すると道の先に紗枝が立っているのに気付いた。

「紗枝ちゃんだ……」

アリスとホミスが声をかけて通り過ぎるが、紗枝は小さな声で言葉を返しただけだった。

紗枝を通り過ぎると、ホミスはふうとため息をついた。どうやら彼も紗枝の扱いには困っているらしい。寂しい子だなとアリスは思った。

#### IV

保健棟に着くとアリスはお礼を言った。

「ありがとうございます、もう大丈夫です。少し休んだら今日はそのまま家に帰りますね」

「それがいい。いくらルージュの月だからって、がんばりすぎはよくないからね」

ホミスはそう言って去っていった。

アリスは保健棟のベッドで少し横になった。少し貧血っぽかったのだろうか。横になったら具合がよくなった。昨日の心労が祟っていたのだろう。

外へ出ると、急に寒くなった。

「そりゃそうよね、昨日雪が降ったくらいだもん。ああ、アルナはなんでこんなに寒いのかしら……。でもアルバザードは世界一過ごしやすいっていうしな……。ああ、今だけカテージュに転校したーい」

雪解けの水をぴちゃぴちやいわせながら歩いていると、アリスはふと立ち止まった。

「紗枝……」

前方には紗枝がいた。

「珍しい。さっきもすれ違ったなあ。それにしてもいつもあの子って一人みたい。友達いないのかしら。話しかけられるのが嫌なのかな」

アリスはすれ違いざまに「こんにちは」と言った。すると紗枝は少しおどおどした感じで「こんにちは」と小さく返した。

「……あの」

何となくアリスは紗枝に声をかけた。

「えっ……」

振り向く紗枝。

「あなたも具合悪いの？そっち、保健棟だけど」

「ううん……」首を振る「……さんぼ」

ゆっくり、ぼしょっとした紗枝の声。

「そう……さんぼ……。じゃあ、私のこれもさんぼなんだろうなあ」

「？」

「ねえ、一緒にどう？」

「え……？」

「……えと……つまり、さんぼしてるもの同士、一緒にさんぼしませんかということなんですケド……」

おずおず切り出すアリス。すると紗枝はあまり表情を変えずに、だが彼女なりに驚いた顔つきで「……私と？」と返した。

「うん、ちょっとぶらつくだけ。私、紗枝ちゃんと話したことなかったし」

すると紗枝はコクリと頷いた。2人は歩き出す。

「ねえ、紗枝ちゃんってどこから来たの？高校一緒じゃなかったよね？」

「私、転校生だから……」

「そうなんだ。どこから来たの？」

「ルティア……」

「いいなあ、リディア＝ルティアの故郷かあ。私も行ってみたいーい」

「伝統的なお国柄で、あまり面白くないよ？」

石畳のある川沿いに着いた。そのまま川沿いに歩く。アルナ大くらい広いと学内に川が流れているものだ。

アリスは横目で紗枝を見た。今までちゃんと見たことがなかった。

紗枝は色の白い女の子だ。ちょっと具合が悪そうにも見える。いつも無表情というか、寂しげな顔をしている。身体は幼く、やせている。ちょっとあどけなく見える。

髪は黒で、前髪をピンで留めて垂らしている。後ろ側は結わいてある。しゃれっ気のない格好で、大人しい彼女らしい。

服は学校指定の薄桃のコート。中は制服で、薄青のスカートと、白に近い青のワイシャツだ。首にはアンスをつけている。首輪型は珍しい。ふつうは腕輪型だ。アリスもそうだ。

一方、紗枝の顔はというと、これがかなり綺麗なのだ。なんていうか、ミーナはパルテのような美人で、光り輝く感じだ。悪く言えば少し派手だ。それに対して紗枝の完璧なまでのユンク顔といたら……。可愛い上に綺麗だ。恐らくこの儂げな顔がなおさら美しさを引き立てているのだろう。

「同じ人間なのになあ……不公平よ」

アリスははあとため息をついた。きっとこの子はカレがほかの女のところに行ってしまうかもなんて怯えることなんてないんだわ。体重だって気にせず好きなものを食べられるのよね、きっと。うらやましいなあ……。

それにしてもこちらから話しかけない限り紗枝は口を開かない。アリスは少しミーナが言ったことが理解できた。なるほど、これはちょっと間がもたないかも。でも、不思議と嫌な感じはしないな。

「ねえ、紗枝ちゃんは音楽室の事件、どう思う？」

「事故じゃなくて、事件なの？」

「う……うん、だってほら、老衰だなんて、やっぱりおかしいでしょ。音楽同好会でも、もしかしたらアデルの仕業なんじゃないかって言ってるわ」

「アデルじゃないと思う」

意外にもすばっと即答した紗枝。

「どうして言い切れるの？病死でもなかったし、傷も何もなかったのに」

すると紗枝はアリスの一步先を歩いた。紗枝が背中越しに喋る。

「アデルは人を食い殺すよ。アンデッドの魔物だって老衰なんてさせない。ダイズアイライみたいな魔物も同じ。溶かすか病死かショック死か」

「それは……確かに。じゃあ一体誰が……」

「アデルでもないし人でもないわ。彼女は老衰なんかじゃない。まだ生きられたはずの魂を抜かれて殺された」

「魂……セレスを？」

「そう。じゃあ、人のセレスを抜くなんてことができるのは……だあれ？」

そう言うと紗枝は右手でコートの手を掴みながら、くるっと振り向いた。

そして初めて彼女なりのささやかな笑顔を見せて、こう言った。

「——死神、よ」

「——！」

アリスは息を呑んだ。紗枝の言葉にではない。今、紗枝の左目が赤く光ったような気がしたからだ。

だが、見直すと紗枝の目は元の緑色になっていた。光の反射だったのだろうか。不気味な言葉と同時だったから、余計驚いてしまった。それにしても——

「死神ですって……？」アリスはおずおずと聞き返した。

「そう。老衰に見せかけて殺せるなんて死神くらいだわ」

儂い顔に戻って答える紗枝。だがアリスはふっと笑った。

「紗枝ちゃん、それはないと思うな。だって死神は死んだ人間のセレスをあの世へ運ぶ存在よ？神でも悪魔でも魔物でも人でもない。ルノと同じように特別な存在よ。彼らの仕事は死者の魂を運ぶこと。人間に害を成しはしないわ、魔物じゃないもの」

すると紗枝はふっと顔色を落とした。アリスは慌てて取り成した。

「あ、ちがうの。紗枝ちゃんを笑ったわけじゃないのよ。ただ、死神はそんなことしないって……ほら……アデルならともかく」

しまった、フォローになってない。アリスは冷や汗をかきだした。

紗枝「大丈夫、気にしないで。私がそう思ってるだけかもしれないから」

川沿いの石垣に腰を預ける紗枝。アリスもそれに倣う。

「ごめんね、頭ごなしに否定しちゃって。けっこう紗枝ちゃんって話しやすいのね。だから私、余計なことを」

紗枝は微かに微笑んだ。アリスもにこっとする。

「じゃあ私もありえない話をするからお返しに笑って」

「ありえない話？」

「そう。実はね、私、死んだ子を見たの」

一人で抱えているのが辛すぎて、ついにアリスは秘密を打ち明けた。なぜその相手が紗

枝なのかは自分でも分からなかった。

「あの子……ピアノを弾いてたわ。私、一旦音楽室を出て雪……あなたじゃないよ……雪を踏んで歩いてた。そしたらピアノの音が聞こえたの。戻ってドアの隙間から部屋の中を見たら彼女がピアノを弾いてた。知らない子だった」

紗枝は黙って聞いている。

「そしたら彼女の後ろにアデルなのか死神なのかは分からないけど、テーベを着た奴が出てきて……彼女は悲鳴をあげて……私はびっくりしてカバンを落としちゃって……そしたらテーベに見られて……慌てて逃げたわ」

逃げたというところでアリスは唇をかみ締める。

「……夢だって思ったの……こんなことになるなんて思わなかった……。私が逃げたせいで彼女は……」

泣きそうなアリスの背中を紗枝は軽くさすってやった。

「ありがとう。……それでね、私、顔を見られちゃったの。でもこんな話誰も信じないと思っ……それに現実だってことを認めたくなくて……黙ってた」

「そうだったの……大変だったね」

「紗枝、信じてくれるの？」

「うん、私はアリスを信じるよ」

にこっとする紗枝。アリスは思わず泣いてしまった。

紗枝は無言でアリスを胸に抱いていた。

「ねえ紗枝、私……どうなっちゃうのかな。あいつに殺されちゃうのかな」

「……大丈夫よ。アリスは殺されない」

「でも、顔を見られたわ」

「貴方はテーベが誰か分からなかったんでしょう？お互い初対面だから、もう一度会わない限りは大丈夫よ」

「……そうかなあ。だといいけど。ん……でもあの化け物って始めからあの顔なの？もしかして普段は変装してるとか」

「それは……そうかも」

「じゃあ普段は人間の顔した誰かが犯人かもしれないってこと？」

紗枝は無言で頷く「アリスは信じないかもしれないけど、死神は普段、人の顔をしてるわ」

「死神……そういえばテーベは大きな鎌を持っていたわ。死神って鎌を持っているのよね。さっきは笑ってごめん、もしかしたら死神って線が本当にありえるのかもしれない……」

でもどうして死神がそんなことを……。アリスの頭はこんがらがった。だがいい。謎を究明するより、こうして誰かが自分の悩みを理解してくれたことがありがたい。

「ありがとう、紗枝。私、なんだか元気が出たよ。あなたと友達になれてよかった」



「ともだち……？」紗枝の顔が見る見る赤くなる。とても嬉しそうだ。

「そう、今度一緒にごはん食べよ？ラマンやミーナを紹介するね。2人とも自分から紗枝に声かける勇気がないのよ。私もさっきまでそうだった。紗枝のこと知ったらきっと仲良くなれると思うよ」

「うん……」紗枝は恥ずかしそうに頷いた。アリスはその手を握った。

「あのね、アリス……もし死神に会ったら……」

「会ったら？」

「ベルを鳴らして」

「ベル……死神はベルが嫌い、か。なるほど、流石は伝統的なルティア育ちね」

しかし紗枝は笑わなかった。

「ほんとよ。覚えておいてね、アリス」

アリスが見えなくなっても紗枝はしばらくそこにいた。先ほどまでは明るかったのに、あっという間に暗くなってしまった。夕方なんてないに等しい存在だ。

外灯が点く。辺りが闇に包まれる。

と、そのとき、鴉の鳴き声が闇を裂いた。青い鴉はひゅっと紗枝の横に降りると、ぼしゅっと光を放ち、瞬く間に青年の姿へと成り代わった。

「青鴉……」

紗枝は青年の名を呼ぶと、すっと抱きつく。青鴉はアデュットで紗枝を優しく包みこんだ。

「紗枝、今日は随分と機嫌がいいようだね」

「うん」

にこおっと笑う。紗枝は青鴉にだけは感情を見せる。

「ともだちができたのよ」

「それはよかった」

青鴉は物静かだ。余計なことは言わない。

紗枝は上を向いて喋る。青鴉は背が高い。すらっとしている。見かけは20代の青年といったところだ。髪が長く、色が薄い。綺麗な、女の人みたいな髪をしている。肌は白い。黒いアデュットを着ている。顔はとても美しく、男とは思えないほどだ。

「アリスっていうの。同じクラスの子よ」

青鴉は黙って頷く。

「今度お昼を一緒に食べることにしたの」

「そうか……。ときに紗枝」

青鴉は紗枝の顔を見つめる。

「例の夢喰の動きについて、そちらで何か分かったことは？」

紗枝はつまらなそうな顔をして青鴉から離れ、石垣に座る。

「……まだ何も。昨日はしてやられたわ。夢織の私がいるこの学校で堂々と夢喰が悪さをするだなんて」

「昨日の少女は夢を喰われていたな。これで夢喰の奴もご満足だろうから、しばらくは騒ぎを起こさないだろう」

青鴉は立ったまま喋る。紗枝は川の流れをじっと見ながら呟いた。

「ところがそうでもないのよ……。どうもそのアリスが夢喰の食餌を見てしまったようなの。それで次は自分が襲われるかもって怯えてるみたい」

「それは……」青鴉は口を押さえる「にわかには信じがたいな。つまり、彼女は夢喰に姿を見られたってことだろう。ならその場で口封じをされているはずだ」

「うーん……」紗枝は水面に手を伸ばそうとするが、全然届かない「もしかして夢喰は彼女を「食べよう」としているのかも」

「なるほど。ではそうなる前に犯人探しといこう」

そう言うと青鴉は鴉に戻り、飛び去っていった。

V

翌日、アリスは昼休みに紗枝を呼びにいった。

「あれ……いない」

ところが紗枝は席を外していた。

「今日は……外で食べるのかな。そっか……。私、はっきり明日一緒に食べようなんて言わなかったもんなあ」

空振りで帰るとラマンとミーナの待つ席へ着く。

ミーナ「どうしたの？」

「あのね、紗枝を誘おうと思ったんだけど」

「え」と眉をひそめるミーナ。昨日断ったばかりじゃないのという顔をする。

「そんな顔しないでよ。あの子、実はとってもいい子なんだから。昨日だって私の悩みを聞いてくれたのよ」

「悩み？」怪訝そうなミーナ「そんなの……私に言ってくればいいのか」

「あっ」アリスは口を押さえる「ごめん……」

「ううん、謝ることじゃないわ。ただ、幼馴染のあんたが私から自立しちゃうのは寂しいなって思っただけ」

「そんなことないよ、私は昔から何も変わってないもん。ほら、キャンプで迷子になったときとかさ。ミーナがいなくちゃ何もできないわ」

ラマン「ん？キャンプって何のことだ？」

ミーナは苦笑いを浮かべる。

「ハネスのときにお互いの家族ぐるみでキャンプにいったのよ。私とアリスは森に遊びにいったの。はしゃいじゃってたから親の言いつけも聞かずに奥まで入っちゃって、それで迷っちゃったのよ。しかも途中ではぐれちゃって」

ラマン「へえ、大丈夫だったのか？」

「まあね。アリスは運良くキャンプ地に出られたの。でもあたしはなかなか出られなくてさ。結局次の日大人に救助されたんだけど、そのときのアリスったら泣き通しでね。どっちが救助されたのやら分からなかったわ」

「み、み～な、言いすぎ！」

「まあそんなことがあって私はすっかりアリスの保護者になってしまったというわけさ」

ラマン「へえ、歴史ありだな」

とそのとき紗枝が教室に戻ってきた。

「あ、紗枝～、こっちおいでよ。もうお昼食べちゃった？」

「あ……ごめんね。今日はちょっと調べものがある。これからまた行かなくちゃいけないの」

「調べものって……図書館？テスト勉強？」

「そんなところ……かな」紗枝は微笑すると「ごめんね。明日食べよう」と言って教室を出て行った。

ラマン「へえ～」

アリス「ん？」

「いや、俺あの子が喋ったの初めて聞いたかも」

ミーナ「そういえば私も……」

放課後。アリスは音楽室へ向かった。ラマンとミーナはまた図書館だ。自分も勉強しないとなあ。でも、将来はピアノで食べられればいいなあ。

「そして、ラマンのお嫁さん……ふふ」

音楽室に入ると、既に会員が来ていた。昨日のような重苦しい空気はなく、日常に戻ったかのようなのだ。

「こんにちは、アリスさん。具合は良くなったかい？」

ホミスが微笑んでくる。アリスは元気よく答えた。

「おかげさまで」

「そりゃよかった。ところで悪いが備品室から持ってきてほしい楽譜があるんだけど」

「あ、はい。持ってきます」

アリスは隣の備品室に入ると、楽譜を探し出した。

部屋には同級生の同好会の生徒がいて、軽く世間話をした。

「こんにちは、アリス」

「あ、こんにちは」

「よかったよ、アリスが来てくれて。一人でここにいるのなんだか怖くて」

「え、どういうこと？」

「ほら、おとといの子がもしアデルに殺されてたらって思うと……」

「ああ……そうね」

「ね、アリスは一昨日ここにいたんでしょう？」

「うん、みんなと同じよ。ルージュだから遅くまでいたわ」

「その子のこと見なかった？」

アリスはどきっとしたが、首を振った。

「ううん……」

「そう。最後までいたのはアリスと先生だから、何か知らないかなって思ったんだけど」

「あはは、もし犯人がアデルで、私が何か見てたら、私ここにいないって」と笑うが、気が気でない。

と、そのときアリスは楽譜を探す手を止めた。

「——ん？……ねえ、いま最後までいたのは誰って言った？」

「え？あなたと先生よ」

「先生？だってあの日は早く帰らなかったっけ？」

そうだ、昨日 2 人で並んで話したときにそう言っていた。先生は早く帰ったから現場を見れなかったと。

「最後まで残ってたのは私よ。先生はいなかった。見間違いじゃないの？」

「そんなことないわよ。先生は一旦帰ったけど、5 時ごろに私校内ですれ違ってるから」

「そうなんだ……」

アリスは首を捻った。

「どうかしたの？」

「う、ううん。なんでもないわ。あ、楽譜みつけ」

アリスは楽譜を引っ張り出すと、音楽室へ戻った。

5 時ごろになると生徒がわらわらと帰りだした。メルセルに発表を控えているアリスはそれでも一人で頑張っていた。

すると消音にしているアンスが光って揺れた。通信機能をオンにすると、アリスはプログラムを出す。かけてきたのはラマンだった。後ろにはミーナもいる。

「アリス、そろそろ帰ろうぜ。夜道暗いし、一緒に行こう」

「あ、うん。そうしよ。今どこにいるの？」

「図書館出たところ。いいよ、そっちまで俺ら迎えに行くから」

「は～い、じゃあナイトを待ってるね」

ふふと笑ってアリスはアンスを切った。

「さて、じゃあ帰ろっと」

パタンとピアノを閉じて荷物をまとめる。とそのとき黒光りするピアノに人影が映った。びくっとして振り向くと、そこにはホミスが立っていた。

「あ……なんだ、先生かあ。びっくりしちゃった。まだ残ってらしたんですね」

「ああ、君もがんばるね。メルセルに向けてかい？」

「ええ」

「そうか、応援してますよ。じゃあもう遅いから帰りなさい」

「はい……って、先生はまだいるんですか？」

「少し片付けとかをしたいからね。君はもう上がっていいよ」

「分かりました」

カバンを手にとってドアノブを握るアリス。と、そこでふと思い出して振り向いた。

「あの、先生。そういえばさっき聞いたんですけど、一昨日も遅くまでいたんですか？」

「一昨日？」

「はい、事件のあった日です」

「いや、早く帰ったよ。確か昨日もそう言ったかと」

「でもさっき備品室で聞いた話だと、先生は5時くらいに学校にいたって」

アリスは上目遣いで見る。ホミスは「ああ」と手を叩いた。

「音楽室は出たけど、事務をするんで少し遅くまでいたんだ。帰ったというのは語弊があったかな」

そうと聞くとアリスはほっと胸をなでおろした。

「よかった。先生がアデルだったらどうしようかと思っちゃいました」

「はあ？あはは、私がアデルなもんか。もしそうなら君みたいな若い子はとっくに食べるさ」

「ですよ。あ、先生、よかったです少し時間があるし、片付け手伝いますよ」

「助かる。じゃあピアノ周りを頼むよ」

「は〜い」

アリスはピアノ周りを片付けだした。拭いたり、メトロノームにカバーをかけたり。

「そういえば、メトロノーム新しくしたんですね」

「ああ、古いのだけどな」

「仕方ないですよ、前のは一昨日壊れちゃったんだし。でも案外脆いんですね」

「そりゃこんなの投げたら壊れるさ」

「あは」

ふきんを折り畳んでピアノの脇に置くと、アリスは「ん？」と首を傾げる。

「でも先生……なんでメトロノームが投げて壊されたって知ってるんですか？」

アリスはおずおずと訊いた。

「ん……？」

ホミスは首を傾げる。

「それ、一昨日、多分彼女が死んだとき、壊れたものです。なんで先生、メトロノームが投げられたって知ってるんですか？」

「いや、落としたと言いたかったんだよ」

アリスは怪訝な顔で首を振る。

「そんな言い間違い……ありえないんじゃないかと」

「単にそう思っただけだって。落としたくらいじゃ壊れないだろ。だからきつと投げて壊したんじゃないかって思ったんだよ。君、神経が高ぶりすぎてますよ。疲れているんだ、もう帰って早く寝なさい」

アリスは笑うホミスに近付くと、突如彼の左腕を握った。

「つつ……！」

顔を歪めるホミス。それを見たアリスは青ざめて後ずさった。

「なんだい、いきなり……」

「その腕……あざがありますよね。私……見たの。死んだあの子がここでテーベを着た誰

かに襲われるのを。彼女は必死に抵抗し、メトロノームを投げつけたわ。それは腕に当たって落ちて壊れた……。私はテーベの顔を……見た。そしてテーベも……私を……」

膝が震える。ホミスはふうとため息をつく。

「だめだ、アリスさん、そんなことじゃ」

近付くホミス。アリスは本能的に何かを察知して後ずさる。

「君が余計なことに気付かなければこんな形で君を失わなくて済んだものを」

「せ……先生？」

「君が悪いんだよ、アリスさん」

「な、なに……」

「君の見たのはアデルじゃない。君が見たのは——死神さ」

「いや……」

「なあアリス、もしかして君が見た化け物っていうのは——」

見る見るうちにホミスの顔が溶けていく。ダイズアイライに吸われた動物のように、肉がこそげ落ち、骨が露出する。うっと唸ってアリスは口を覆う。

「——こんな姿をしていなかったかい？」

## VI

「いやああああ！！」

アリスは力の限り絶叫した。

それは紛れもなくあのとき見た化け物だった。

紗枝の言った通りだ。犯人はアデルなんかじゃなかった。死神だったんだ。

「折角君の夢が育ってから喰ってやろうと思っていたのに……残念だよ。君の夢はまだ喰えない。だが私の正体に気付いたからには生かしてはおけないな」

虚空から鎌を出すホミス。間違いない、こいつだ。この顔、この鎌。忘れようがない。

「来ないで！」

アリスはメトロノームをホミスの顔に投げつけた。うっとホミスがのけぞった隙に入り口へ走る。ところがあっさり回り込まれてしまった。

ホミスはブンと鎌を振るう。とっさにカバンでガードするが、カバンが切られて荷物がばらばらと散らばる。

「ひっ！」

アリスは恐怖に怯えて尻餅をついてしまう。

「だめ、動かないと。でも、ムリ……動けない」

がちがちと歯が震える。ホミスは鎌をアリスの首に架ける。

するとそのときドアがガチャッと開いた。

ハッと上を見上げると、そこにいたのはラマンとミーナだった。そうだ、彼らは自分を迎えにきてくれていたのだ。

「ラマン、ミーナ！」

ラマン「アリスッ！？ど、どうしたんだ一体！」

ラマンは目を丸くしてホミスを見つめる。

ラマン「な……なんだよ、こいつ……」

ミーナ「ば……化け物……」

ホミスは戸惑って一瞬固まる。アリスはその隙に鎌から首を外して逃れ、入り口に駆け寄る。

アリス「先生よ！先生！あれ、ホミス先生なの！」

ラマン「なんだって！？」

ミーナ「どういうこと！？」

アリス「とにかく先生なの！いいから走って！」

アリスは2人が来たことで勇気付けられ、彼らの手を取って廊下へと逃げた。

廊下は不思議なことに誰もいなかった。全速力で走る3人。ところが後ろからホミスが鎌を持って追いかけてくる。



ラマン「なっ、なんだよあいつは！」

ミーナ「ホミス先生ってどういうことっ!？」

アリスは心臓が破裂しそうになるのを堪えて叫び返す。

「音楽室の事件は事故じゃなかったの!あの子は先生に殺されたのよ！」

ラマン「先生が殺しただって!？」

「先生の正体は死神なの!アデルなんかじゃなかった。私、あいつが女の子を殺すのをあの日見ちゃったのよ！」

ミーナ「じゃあこれ口封じってこと!？なによ、それえ！」

くるっと振り返ると、ミーナは廊下に備え付けられた消火栓を開けて、ホースを取り出した。

「ラマンッ、開けて！」

「お、おうっ！」

察したラマンは消火栓を開く。ドーンと放水が起こり、ホミスを吹き飛ばす。

「よしっ！」

ミーナはホースを投げ捨てると「走るよ！」と言ってアリスの腕を取った。

階段を転がるように下りていく。と、そのとき窓の割れる音が響いた。

「な……なに?上の階の窓が割れたの？」

アリスが窓の方を見ると、なにやら黒い影が降っていった。なんだろうと思ったが、余裕がないので構わず階段を降りる。

「きゃあっ！」

唐突に叫んだのはミーナだった。アリスが首を上げるとそこにはホミスがいた。

「ど……どうして……」

ラマン「こいつ、窓を破って飛び降りて先回りしたんだ！」

ミーナ「引き返すわよ！」

再びアリスを引っ張るミーナ。だが上に逃げるということは脱出から遠のくということだ。案の定、3人は最上階まで追い詰められてしまった。

最上階に着くと廊下を走る。だが、いずれは行き止まりに着いてしまう。突き当たった教室のドアを蹴破るように開けると、鍵をかける。

「ど、どうしよう……」

ガチガチ震えるアリス。

ミーナ「今がチャンスよ。少し時間があるわ。アンスで警察を！」

ラマン「わかった!……よし、信号を送ったぞ!だが……来るまで持つかどうか……」

アリス「部屋の鍵を叩いて壊しちゃおうよ!あと、机で堤防を作ろう！」

ぱっと動き出す3人。ラマンが棒で鍵を壊し、あとは3人で机を運んだ。

ラマン「大丈夫、10分もあれば世界の警察アルバザードから助けが入るさ！」

だがその言葉もむなしく、轟音とともにドアに猫の爪のような鋭利な刃物が突き刺さった。……鎌だった。

ミーナ「強行突破する気ね……」

アリス「アルテ……アルテ……私たちをお守りください……」

3人はドアの強靭さに期待した。ところがその願いもむなしく、ドアは死神の鎌によって破られた。

机を吹き飛ばし、ホミスが入ってくる。3人は身をかがめて縮こまった。

だめだ……もう後がない。

「アリス……」

ラマンは膝で立つと、アリスの小首を持ち上げた。

「俺に勇気をくれ」

「え——？」

アリスの言葉を塞ぐように、ラマンはアリスの唇を奪った。

「——！」

ラマンはゆっくり顔を離した。

「死ぬなよ。レナも着るな」

「ラ……ラマン？いや……何をする気？」

アリスはぎゅっとラマンの腕を掴む。

ラマンは棒を掴むと、ホミスに殴りかかった。肩を打たれてホミスが屈む。

「今だ、逃げろ！」

「アリス、行くよっ！」

ミーナはアリスの手を引いて走る。教室を抜けたところでラマンのくぐもった声が聞こえ、アリスは振り返る。

ラマンの胸には、死神の鎌が刺さっていた。

「いやああ！」

絶叫するアリス。戻ろうとする彼女をミーナが引き止める。

「アンタが今戻ってどうするの！あいつの意思を無駄にする気！？」

アリスはミーナに引きずられて走った。

ミーナ「くっ、それにしてもあいつを倒すか逃げるかしないと……」

倒す？アリスはふっと顔を上げた。そうだ、今までは逃げるしか考えていなかった。倒すという選択肢もありえるのだ。

そのときアリスはふっとあることに気付き、ミーナの手を引いて階段を駆け上がった。

「えっ、ちょ……アリス、上に行ってどうするのよ！」

案の定最上階でホミスとすれ違う。ホミスは低い唸りを上げて追いかけてくる。アリスは廊下を全速力で走ると、あるところで急に立ち止まった。

「アリス、何やってるの!？」

何も答えず、アリスは窓を開ける。ホミスが鎌を持って数メルフィのところまで押し寄せてくる。

「どうせ飛び降りるなら低いところからにきなさいよ！」

「ミーナ、耳塞いで！」

「は？」

ミーナがアリスの意図を理解する前に、アリスは窓から身を乗り出して思い切りそれを引っ張った。

突如、闇を切り裂くような轟音が響いた。

ミーナ「きゃっ、何!？」

それは学校のベルだった。この校舎には屋上にベルが付いている。メルセル祭りでイベント係がベルを校舎内から鳴らせるよう、この時期は毎年ベルに紐がついていて、最上階の窓を開ければ鳴らせるようになっているのだ。

「ぎゃあああ！」

ホミスの絶叫がこだまする。

「あのね、アリス……もし死神に会ったら……」

「会ったら？」

「ベルを鳴らして」

「ベル……死神はベルが嫌い」

「ほんとよ。覚えておいてね、アリス」

アリスは紗枝の言葉を思い出していた。

ホミスは地面を転がりまわる。

「なるほど、御伽噺どおりってわけね！」

ミーナは事を理解したようで、アリスと手を合わせてガンガン鐘を鳴らした。

ホミスは声にならない悲鳴を上げ、やがて動かなくなった。と同時にどンドンホミスの影は薄くなっていき、やがて光の砂になって消滅した。

「……消えた」 呟くミーナ「あは……勝ったんだ、私たち。死神をやっつけたのね！」

「うん、助かったみたい」

「よかったあ！」

ほっと胸をなでおろすミーナ。だが次の瞬間蒼白な顔で叫んだ。

「何もよくない！ラマンを助けなきゃ！」

ダッと走り出すミーナ。アリスはそれを追い抜かさんばかりの勢いで走る。

だが、教室の入り口でラマンは胸から血を流して死んでいた。

「そんな……ラマン……私たちは結ばれるはずだったんでしょお？なに神話どおりになっ

てるのよ……。ほら……。神話の演技なんでしょう？メルセルにやろうよ、それ……」

アリスはラマンを揺さぶる。ミーナは何も言えずに立っていた。

泣きはらすアリスの肩を抱くミーナ。

アリス「私……。もう生きていけない」

「アリス、あなたにはピアノがあるじゃない。夢を捨てないで」

「でも……」

「もうあと少しで警察が助けにくるわ。ラマンも……。安全なところに行ける」

「うん……。うん……」

「ただその前にしなきゃいけないことがあるでしょ」

「うん……。どんな……？」

ミーナはポケットからナイフを取り出し、アリスの手を取った。

「これでラマンをどうしろっていうの？」

「ラマンじゃないわ……」と言うと、ミーナは手に力を加えた。ぐちゅっと潰れた音がして、アリスの指が落ちた。

アリスは一瞬何のことも分からない顔になったが、血を流す自分の手を見るとやがて真っ青になり、声を失った。

「あ、あ……。ミーナ。な……。なにを……」

次の瞬間、ミーナは痛みで泣き叫ぼうとしたアリスの口にハンカチを詰め込み、羽交い絞めにした。

「むぐうっ！」

屠殺される家畜のような声を上げるアリス。真っ赤な顔で涙を流す。

ミーナはアリスの耳元に口を近づけると、囁くように話す。

「ねえ、どうしてセレスの運び手である死神が人を襲ったか、興味ない？」

「……！？」

「確かに死神は死人のセレスをヴェーユに連れていくのが役割よ。でもそれは真面目な死神。死神ってのはルノの部下で、たくさん存在する。だから中には悪い子もいるのよ。

死神には人間のセレスを食べるものがあるの。食べるためにわざと殺すのね。でもせっかくならおいしいセレスを食べたいじゃない？じゃあどういふセレスがおいしいと思う？

それはね、生き生きしたセレスよ。病気などで死んだ人間のセレスとは逆ね。生命力に溢れ、希望に溢れたセレス」

ミーナはアリスの口元から手を離す。

「どうアリス、少しは落ち着いた？」

「あぁう……。し、死神が……。セレスを……？」

「そう。死神が最も好むのはね、最も希望に満ちていた人間が最も絶望の底に落ちた瞬間のセレスなの。果実でいう熟したときってとこかな。

だから死神はアデルみたいに無作為に人を襲わない。その人間と付き合い、ときにはラポールを形成することもある。いずれにせよ、高いところから地の底に落として、絶望したところを殺すのよ」

「どうして……ミーナがそんなこと……」

「なんで知ってるのかって？それじゃ訊くけど、あんたハネスのときのキャンプ、覚えている？」

頷くアリス。昼にラマンと話したばかりだ。

「そう、あれからもう随分経つわね。私はあんたと森に入り込み、迷ってしまった。しかもはぐれて。あんたは運よく先にキャンプ地に戻れたけど、私は迷ってしまい、次の日になってから大人に助けられた。——と、いうことになっているわよね。

でも本当はそうじゃなかったのよ。あの日、私は迷ったあんたを探して森を彷徨った。そして夜になって暗くなり、道が見えなくなった私は崖から落ちたの」

「え……」

痛みを堪え、掠れた声を出すアリス。

「怪我をした私は動けなくなったの。そんな絶望した私を食べにきたのが 1 匹の死神。ところがね、私、食べられなかったのよ。その代わり……」

「……」

アリスは押し黙る。

「アリス、あんたが悪いのよ。私を置いて自分だけ安全なところに逃げて……。あの日の夜はキャンプですやすやしていたの？私が死神に襲われている間に、あんたは私を探しもしないで寝てたのね？……あんたはいつもそうよ。結局は自分が可愛いんだ」

「そんな……私……ちがうっ！」

「ちがくなんかないさ。あんたは一昨日だって音楽室で女の子を見捨てたんでしょが」

「それは……」

ミーナは鼻で笑う。そしてそれがミーナの顔を見た最後だった。

「あのときあんたが助けに来なかったから私は……私は……」

見る見るうちにミーナの顔が溶けていく。まるでホミスのように。

「——こんな風になってしまったの」

「いや……いや……」

アリスは猫のように震える。ミーナの顔は崩れ、半分腐った死体のような、髑髏をところどころむき出しにした死神が現れた。

「ふふふ、これが私の姿よ……アリス」骸骨が口を開く「ホミスのやつも役に立ったものね。あいつのおかげであんたは愛する彼氏を失った。そしていま指を失ったことでピアノの夢も絶たれた。希望でいっぱいだったあんたは絶望の淵に立たされた。あんたのセレス、最高においしそうよ」

「みーな……みーな……！」

アリスは呆然と首を振るだけだ。もう痛みさえ感じるができない。

そのとき闇の中から声がした。

「そうね、おいしそうなセレスね。カレもピアノも、そして大切な幼馴染も失ってしまったのだから」

「だれだっ！」ミーナは低い声で怒鳴ると、入り口の方を睨んだ。

闇の中から現れたのは紗枝だった。

「さ……さえ……？あなた、紗枝なの？」

アリスが見間違えそうになったのは闇のせいだけではない。紗枝は学校の制服を着ていなかった。頭には結婚式の白いレースを、身体には葬式用の黒いドレスを着ていた。レナだ。戦地などに赴いて戦死した恋人に対し、遺された女が亡き恋人への忠誠と変わらぬ愛情を誓うために行う結婚式と葬式を合わせた儀式のことだ。その儀式レナに使う服を15歳の紗枝は着ていたのだ。

「ごめんね、アリス。遅くなってしまって」

小さく呟く紗枝。物憂げな様子は相変わらずだ。そしてその左目はいつもの緑の眼ではなく、禍々しい赤の眼だった。

「紗枝……貴方、その眼は……」

アリスは何が何だか分からず、困惑した顔をした。

「アリス、今助けてあげる」

「何言ってるの紗枝……。にげ……にげないと……」

しかしミーナが間に割って入る。

「逃がすわけないさね、紗枝。私を見た以上、そのレナはあんたに片思いしている男にでも着てもらおうよ」

ミーナは虚空から鎌を取り出し、紗枝に駆け寄る。紗枝はふっと笑うとびよんと高く跳んで鎌をよける。

「アリス、来て！」

紗枝はアリスの手を取る。ところがアリスは腰が抜けて立てない。

「アリス、立って！」

「む……無理よ……腰が抜けて……！あ、紗枝、後ろ！」

「えっ？」

紗枝が振り向くと同時にミーナの突き出した鎌の柄が紗枝の頬を打った。

「きゃあっ！」

小さな悲鳴を上げて紗枝はのけぞった。ミーナはその隙を逃さず、紗枝の腕を掴み、思い切り引き寄せた。そして有無を言わず顔を殴った。紗枝は手で頭を守ろうとするが、繰り返し殴られ、次第に動きが弱くなっていった。ミーナは紗枝の髪の毛を掴んで床に引きずり回した。地面に丸くなって倒れる紗枝の背中を蹴り、反転させておなかを踏みつけ

る。紗枝はすっかり怯えてしまい、犬に噛まれた少女のように悲鳴を上げる。

アリスは見ていられなくなって叫んだ。

「やめてえ、ミーナ！紗枝は関係ないでしょ！紗枝を傷つけないで！」

すると床に這いつくばった紗枝が代わりに小さな声で呟いた。

「せ、青鴉……遅い……よ」

「え？」

アリスが怪訝そうな顔をして聞き返そうとした瞬間、闇の中から背の高い男が現れた。青鴉だ。手には大鎌を携えている。

ミーナ「誰だ、キサマ！」

「青鴉……紗枝の守護者だ」

紗枝「……もうちょっと……早ければ……の……話……だけどね……」

おなかを押さえながらよろよろ立ち上がる紗枝。

青鴉「守るべき相手がちょこまか動くわがままな姫なので、中々大変な役柄でもあるがな」

ミーナ「戯言を！キサマもラマンのように殺してくれる！」

鎌を構えて青鴉に飛び掛るミーナ。青鴉は表情も変えずにその大きな鎌を持った腕を振るう。ぎいんと音がして鎌が跳んだ。ざんっと机に刺さったのはミーナの鎌だった。

「なにっ!？」

慌てるミーナ。青鴉は涼しい顔のまま大きく薙ぐと、鎌はミーナの胸を切り裂いた。

「ぎゃああああ！……くそっ、キサマ、その鎌……死神だな……なぜ邪魔をする」

「夢喰ふぜいが「なぜ邪魔を」だと？笑わせる。我々死神の邪魔をしているのはお前のよ  
うなはぐれ者だ。死んで詫びろ」

すっと青鴉はミーナの腕に鎌をかけると、あっという間にミーナの腕を切り落としてしま  
った。ミーナは腕を押さえて絶叫する。

「先ほどのピアノの夢を失った 2 人の少女の痛み。今のは恋人を守って死んだ少年の痛  
み。そしてこれが——」

青鴉はミーナの首に鎌をかけた。

ミーナ「い、いやだ……たすけて……」

「——これが俺の姫を傷つけた報いだ。夢喰よ、滅べ！」

斬っと音がして、ミーナの首が転がった。

青鴉は鎌を虚空に返すと、紗枝を持ち上げてアデュットの中に抱きかかえた。青鴉の身  
体が緑色の光を放つと、軽症だった紗枝の傷が癒えていった。

「紗枝、どうして俺が来るまで待たなかった？」

「だって……アリスが殺される場所だったんだもの。放っておけなかった……」

「そうか……。別々に探して回ったのは失敗だったな」

「しょうがないよ。ありがとう」

紗枝はふうとため息をつく、青鴉に礼を言ってアリスを見た。

アリス「み……みいな……」

アリスは掠れた声を出す。ミーナの死体に這いずり寄ると、その死体にすがって泣きだした。

青鴉は無言でアリスを見ていたが、鴉に姿を変えると部屋から去っていった。

「アリス……」

近づく紗枝。アリスの肩をそっと抱く。

「さ……紗枝……ミーナが……ラマンが……先生が……」

アリスは歯の根が合わない。もう精神的に限界を超えているのだろう。

「うん……大変だったね。大丈夫、もう怖いことは起きないわ」

「紗枝……私……ピアノが……もう……」

「アリス……」

「ラ、ラマンも失って……ミーナも失って……ピアノも……できない。私……私……ああああああああああああああああああああああ」

「アリス……アリス……悲しいのは分かるよ。でも絶望しないで。あなたは皆に助けられて生きながらえたのよ。ラマン君たちの勇気を無駄にしないで」

だがダメだった。アリスの心はもう何も受け付けることができなかった。アリスは発狂し、嗚咽と悲鳴が混ざったような奇怪な声を上げて、頭をかきむしりながら地面をのた打ち回った。

「アリス……」

悲しそうな顔で見つめる紗枝。

アリスはやがて紗枝の腕を掴むと、突然抱きついて泣き出した。数秒おきに狂気と冷静が入れ替わる。現実を受け入れられない自分が自分を狂気にし、現実を理解する自分が自分を冷静に戻す。2つの本能がアリスを揺さぶった。

「紗枝……私……私……どうしよう、どうしよおお！」

アリスの髪に手櫛を入れてやる紗枝。その目を見つめ、紗枝は静かに問うた。

「ごめんね、アリス……私……あなたの夢を元通りにしてあげることができないの。ごめんね、アリス……私……あなたを救えない」

「紗枝え……」

「アリス……自分の身に起こったこと……認めたくない？こんな世界はいや？」

私はあなたを救えない……夢を元通りにはできない……。

でも……あなたのために夢を織ることはできる」

「夢……を」

「あなたが望めば私はあなたに夢をあげる。そこは元通りの夢の世界。ラマン君はあなたの恋人で、ミーナちゃんはあなたの良き幼馴染。ホミス先生にピアノの稽古をつけてもらって、あなたは今年のメルセルの演奏会で才能を買われ、ピアノの道に進むの……」



アリスは小さく何度も頷く。  
「でもね……それは夢の世界。  
——やさしい、嘘  
そしてあなたは夢の世界を選ばないこともできる。  
大人しく、貴方を待つこの先の現実を迎えることもできる」  
「夢……現実……」  
小さく呟くアリスに紗枝は頷く。  
「ねえアリス、どっちがいい？——やさしい嘘と冷たいほんとう」

アリスは誰にも聞こえない声で呟いた。  
紗枝は耳をアリスの口元に寄せ、彼女のアルカを聞いた。  
そして紗枝はゆっくりと、アリスの唇に自分の唇を重ねた。

## VII

ラマンからの連絡を受けて教室に辿りついたとき、あまりの惨状に警察は驚愕した。

教室はドアに刃物のようなもので壊された跡があり、吹き飛ばされた机が転がっていた。床にはところどころ血が付着し、教室の入り口では通報した少年ラマンが胸を鋭利な刃物で刺されて死んでいた。

また、教室内には首の転がった化け物の死骸があり、鐘のある廊下には謎の砂が落ちていた。

犯人は不明。化け物の死骸の正体はアンスによるとアルナ大アルハンの学生で、ラマンの同級生だった。調べでは 15 歳の少女だが、どう見てもその顔は死後数カ月経った腐乱死体であった。

腐乱死体がラマンを殺せるはずがない。彼女はどこかで殺され、ラマンはここで殺されたとしか思えない。だが、生徒の証言によると腐乱死体の主であるミーナは今日もいつもどおり授業に出ていたという。

警察は死体がミーナでないと考えたが、生体認証の結果ミーナ本人であることが発覚。警察は学生たちの混乱を恐れ、この事実を闇に葬った。

現場は争った跡や犯人の残した血などがあるものの、犯人が逃げた足跡もなく、凶器も見つからなかった。それにしても犯人はどこにいったのだろうか、あるいはこの死体の中にいるのだろうか。警察は首を捻るばかりだった。

警察はその夜、唯一の生存者である学生を保護した。学生の名はアリス。調べによるとラマンの彼女だったらしい。

だがアリスは廃人になっており、警察の呼びかけにも一切応じず、一步も動くことができなかった。死んではいないものの目は虚ろで、まるで別の世界にでも行ってしまっているかのようだった。警察はため息をつきながらもアリスを病院へ送った。

死んでいたラマン、今日登校していたのに腐乱死体となって発見されたミーナ、廃人となってしまったアリス。この 3 人の間に一体何が起こったというのであろうか。

期を同じくして警察はホミスが失踪していることを知った。生徒のことを報告しようとしたがホミスは一切連絡に応じず、それがきっかけで失踪が知れるところとなった。警察は従ってホミスを重要参考人として捜査を開始した。

警察は学生に情報を公開しなかったが、生徒たちはこれを格好のゴシップネタとして噂した。

雪解けの石畳を、紗枝は歩いていた。

横には青鴉が付き従う。

「ねえ……これでよかったのかなあ」

「彼女は自分から望んで夢を見た。紗枝は彼女の願いを叶えたにすぎない」

「そう……だよ」はあっと息を手にかける「さむいなあ……」

「ところで紗枝、どうして彼女に黙っていたんだ？」

くるっと振り向く紗枝。

「……なんのこと？」

青鴉は一拍置いてから続ける。

「自分も死神だということを——だ」

紗枝は無言で川を見つめた。さらさらと流れる川。

「……言い忘れたの」

「せっかくできた友達に死神だということで嫌われたくなかったんだらう。結局お前は彼女に嘘をついたということだ」

「嘘じゃないわ」紗枝は川に石を投げて寂しそうに呟いた「……人工事実……だもん」

「自分が死神であることがそんなに嫌か。お前、まだあのころのことを引きずって……」

「あら青鴉、今日はやけにおしゃべりね。私の唇で塞いであげようか？」

ふふっと笑う紗枝。青鴉は紗枝をアデユットに包み込んで頭を撫でた。

「いや、遠慮しておく。俺には夢をくれる必要はないよ、夢織のお姫様」

紗枝はにこっとするが、やがて青鴉の懐から離れようとする。しかし青鴉は離さない。

「青鴉？」

「前に言ったな、お前の泣く顔は見たくないと。だから今はしばらく俺の胸の中に入れてくれないか」

「うん……ありがとお……」泣きじゃくった声で紗枝は頷いた「あのね……」

「うん？」

「ともだち……できて……嬉しかったの……。アリス、いい子だった」

紗枝はぎゅっと青鴉の袖を握った。

「さよなら、アリス。いつかあなたの身体が死んで夢が終わったら、私がヴェーユに連れて行ってあげるからね。そしたらお昼、いっしょに食べよ？約束だよ……アリス……」

——終

## <あとがき>

10月31日11時45分。あとがきを書き終え、この一文を足す。

一応10月以内という目標は達成できたようだ。

07年の10月、メル原作の小説が水に流れたことで、何かほかのものをやりたいなと考えた。アルディアは中々終わらないので短めのものと思った。

そこで自分がやったことのないものを考えてみた。

- ・ 1話完結物
- ・ 娯楽小説
- ・ スリラー系

また、自分の書く話は性や排泄などが一切ないものとリアルに包み隠さず書くものに分かれる。

高校生のころは前者が多かったが、ネットでは特に後者しか出していない。それで今回は前者にしようと思った。

ネタは何にしよう。そうだ、今までは人間が主役だったので、何か神話上のキャラにしよう。だが吸血鬼だと最近読んだマンガのパクリで面白くない。何かこうアンティスらしい特徴的な……そうだ、死神だ。神でも悪魔でもない特別な存在死神だ。これを使おう。そう思った。

主人公の名前は会社の帰り道でふと決まった。sae。雪だ。これからの季節にいいと思った。

家に帰って漢字を当てようと思い、「さ」と「え」の字を探した。「さ」の時点で1字決めたとき、ここで初めて「ん？」と思った。いや、この話が分からない人は無視してよろしいです。

だが驚くことにまだこの時点では気付いておらず、「え」は何があるかなと考えて初めて「あ……」と気付いた。言うまでもないが、物凄く凹んだ。そういえば「ち」を抜いただけだと気付くのに数秒要った。

紗枝は大人しい性格の設定だ。紫苑が強すぎたので逆に弱い設定にした。従って彼女を守るキャラが必要だ。そしてランヴェムが生まれたが、そのままでは漢字にならないので日本語では青鴉にした。xelveやcuuveが印象的だったことと、青鴉という名前が気に入っていたため、ある人から借りた。

次に死神が何をするかを考えた。死神と人間を考え、夢喰が生まれ、夢織が生ま

れた。夢織がどういうジョブか決めるほうが大変だった。

夢喰は「ゆめくい」と読んでいるが、「ゆめおり」と混同すると問題かと思い、「むが」にしようかどうか迷っている。何となく悪役っぽい音でしっくりくる。名前としては前者は『嘘喰い』の影響で、後者は『喰霊』の影響だ。

吸血姫『美夕』や『夕維』のイメージに近いが、話の構成は似ても似つかなくなってしまう。

また、場所がアルバザードなので、アルバシエルトを読み返しつつ学内の様子を書いた。そのため、美夕などとはさらに離れてしまった。あの世界観は好きなので、雰囲気だけでも継承できていればよいのだが。

基本的に「これどこのサスペリア？」という方針で行こうと思ったので、ハッピーエンドは避け、同時に、分かりやすいバッドエンドも避けるようにした。

主人公紗枝の出番は実は少ない。この辺りは美夕とまるで異なる。むしろ『ブギーポップは笑わない』に近い演出だろう。もっとも、多視点ではないが。

戦闘シーンは短くするつもりだったが、案外長くなってしまった。最上階の追われる恐怖は『玲音の書』のシェルテス戦を思い出したが、玲音の追われる恐怖は『Clock Tower』というゲームのシザーマンをモチーフにしてできたものだ。

戦闘シーンにおける紗枝の位置付けは紗枝の無力さを強調しすぎたきらいがあり、1話で先入観を持たせたのは良くなかったかもしれない。

ところで言語の問題だが、今回はアルバザードが舞台だ。紫苑みたいな日本語交じりにするだけの正統な理由がない。また、某所で紫苑の方法が人工言語として良策であったと評価していただいたが、それに胡坐を搔いて同じやり方でやるのは避けようと自戒した。

かといって全編アルカでやるのも読者が厳しい。対訳をつけると日本語だけ読んで終わりだ。そこで今回考えたのが、対訳本でなく日本語版とアルカ版を2つ同時に作り、どちらも正編とするというものだ。どちらが訳本ということはない。

対称性が分かるよう、日本語版を「玄の糸」、アルカ版を”*meli e virtues*”（白月の糸）とした。色はどちらがどちらでも良かったのだが、「玄」と「糸」を組み合わせる言葉遊びをしたかったので、日本語を黒にした。ちなみにこの言葉遊びの意味が知りたい場合、「玄」を漢和辞典で調べてみるとよい。きっと学術的な *mert* に出会えるから。

とはいえ、正編2冊を作るだけでは体裁上は訳本何も変わらぬではないかという指摘があるだろう。それは否めない。そこで、正編を2冊作ることのアルカの意義を考えてみた。

それは対照資料の作成という意義だ。川のほとりでなど、アルカで対照できる資料は非常に少ない。紫苑などは訳本さえ作者は作っていない始末だ。小説の形式で対照資料が乏

しいというのは人工言語として良くないのではないか。それで正編を 2 冊作るに至ったというわけだ。

どちらも正編であり互いに対になっていることを表現するために、同じデザインの表紙を各言語で作ることにした。また、小説に表紙を入れることで少しコレクターズアイテム的な要素を入れようと思ったのだが、実際にはそんな偉そうなことはいえず、表紙がついた分少しは小説らしくなったかよよしという程度が正直なところ限界だろう。

だが実はそれだけだとやはり訳本を作ったのと大差ない。だからこう考えた。

対照資料が必要というのは分かった。アルカと日本語の対照資料にしよう。だがそれだけではつまらない。では、2 冊読んで初めて謎が解ける作りだったら？あ、少しはいいかもしれない。

紫苑はアルカ部分を読まないで虫食い状態でしか文を理解できなかった。今回は黒の章を読めば物語が読める。だが、アルカができる人へのささやかなおまけとして白の章を読んでこそ解ける謎を散りばめておいた。だからこれらの本は白黒 2 冊でようやく 1 つの本となり、訳本に留まらない仕組みになっているわけだ。

これは作者のちょっとした悪戯なので、遊び心を大目に見てほしい。

セレン＝アルバザード